

## 博士学位論文内容の要旨

学位申請者氏名	松 崎 行 代												
論 文 題 目	地域社会を基盤としたまちづくりに関する一考察 —いいだ人形劇フェスタへの運営および観劇への住民参加の実態から—												
論文審査担当者	<table style="width: 100%; border: none;"> <tr> <td style="padding: 2px 10px 2px 0;">主 査</td> <td style="padding: 2px 10px 2px 0;">西 尾 久 美 子</td> <td style="text-align: right; padding: 2px 0 2px 10px;">Ⓔ</td> </tr> <tr> <td style="padding: 2px 10px 2px 0;">審査委員</td> <td style="padding: 2px 10px 2px 0;">中 道 仁 美</td> <td style="text-align: right; padding: 2px 0 2px 10px;">Ⓔ</td> </tr> <tr> <td style="padding: 2px 10px 2px 0;">審査委員</td> <td style="padding: 2px 10px 2px 0;">亘 明 志</td> <td style="text-align: right; padding: 2px 0 2px 10px;">Ⓔ</td> </tr> <tr> <td style="padding: 2px 10px 2px 0;">審査委員</td> <td style="padding: 2px 10px 2px 0;">竹 安 栄 子</td> <td style="text-align: right; padding: 2px 0 2px 10px;">Ⓔ</td> </tr> </table>	主 査	西 尾 久 美 子	Ⓔ	審査委員	中 道 仁 美	Ⓔ	審査委員	亘 明 志	Ⓔ	審査委員	竹 安 栄 子	Ⓔ
主 査	西 尾 久 美 子	Ⓔ											
審査委員	中 道 仁 美	Ⓔ											
審査委員	亘 明 志	Ⓔ											
審査委員	竹 安 栄 子	Ⓔ											

いいだ人形劇フェスタ（いいだ人形劇カーニバルとして当初は開催されたが、人形劇フェスタに途中で名称変更された、以下、人形劇フェスタと記す）は、飯田市で開催される日本最大の人形劇の祭典であり、8月上旬の6日間の開催中、上演会場 130、上演ステージ 450、運営参加の市民ボランティア約 2,500 人、観客延べ約 45,000 人を数え、現在 38 年間継続開催を続けている。これほどの大規模な祭典を実現させているのは、小学校区を範囲とした市内全 20 地区の地区公民館および自治会＝集落単位に設置された分館を中心に行われる地区公演の存在によってであり、先に挙げた 2,500 人の市民ボランティアの約 5 分の 4 は、各地区に設置された地区公民館の役員や、集落＝区で組織された分館の役員および各集落の諸団体や区住民である。

人形劇フェスタは、市民文化活動として、その理念を「誰に強制されることなく主体的にかかわりつくりあげる活動」としているが、はたして真実はどうなのか。本論では、「みる 演じる ささえる」という多彩な参加形態、また、地区公民館や分館の役員としての地区公演実行委員・有志としての通称本部実行委員・その他学校や飯田市婦人会など諸団体に属した参加と、多様な市民の参加形態を可能にしている人形劇フェスタにおいて、特に、2,500 人の運営に携わる市民ボランティアのうち、その約 5 分の 4 を占める地区公演実行委員会にたずさわる住民の実態を、住民そしてその生活基盤である集落＝区の視点から捉えて分析し、人形劇フェスタという市民文化活動が、他に類を見ない多くの市民参加を維持しながら 38 年間にわたり継続開催されている要因を解明することを目的とした。

そこで次の 3 点を課題として住民の人形劇フェスタへの参加実態の分析を行い、考察をまとめた。

1 点目は、行政の人形劇フェスタへの取組みと住民との関係である。この点について、行政が人形劇フェスタを、まちづくりを目指した文化行政の中にどのように位置づけてきたか、そして、その動きのなかで市民はどのようにかかわってきたのか、人形劇カーニバルの担い手を行政・飯田市外の人形劇団関係者を中心とする劇人・人形劇フェスタ実行委員会の構成員である市民（地

域社会との関係ではなく、個人の意思で参加する市民)・地区公演を支える区住民の4つの範疇に区分し、それぞれの関係を軸に38年間を4期に分けて実態を分析した。

その結果、行政は、一貫して市民が作り上げる人形劇の祭典を、まちづくりをめざした文化政策として位置づけ、その達成のために取り組んできたことが明らかとなった。行政はその状況を「市民に下ろす」という言葉で表現していたが、市民が拒絶せずその環境を受け止める状況をつくり出すことにも行政は成功していたといえる。多くの市民の参加を実現させるために地区公民館を活用したことや、開始にあたり祭典の意義をわかりやすく示し市民の納得を得るために国際児童年を利用して子どものための祭典としたこと、市民主体の運営組織となった人形劇フェスタへの増額した予算の確保などがそれにあたる。こうした点からは、行政は、まちづくりの主体者である市民と飯田市というまちについての確に把握し、人形劇フェスタ実施に関して適切な対処ができていたといえる。

2点目は、市民の運営への参加についてである。この点について、2,000人近くの住民の地区公演へのボランティア参加を可能にした公民館システムを明らかにするとともに、公民館システム活用の成功について地区公演を支える分館と分館の基盤である集落との関係から分析した。

まず、多くの市民参加を継続的に可能にした公民館システムについて、以下の3点が考察できた。①市民にとって最も生活に密着した身近な地域社会＝集落に分館があり、この分館を地区公演に活用することにより、区住民は人形劇フェスタに参加している。②分館の役員は地区公民館の役員を兼ねていることが多く、区住民は地区公民館の主事の社会教育的な視点からの援助を受けながら公民館活動に取り組んでいる。③飯田市公民館が人形劇フェスタ地区公演を統括してかかわっていることで、地区公演への参加が結果として市全域への拡がりをもった人形劇フェスタの一部を担うことになり、地区公民館20館が1つの活動に取り組む一体感と、現在もやや閉塞的な集団性が残る伝統的な集落のまとまりが醸し出す集落間の競争意識が、住民の取組みへの積極的姿勢をつくっている。

そして、公民館システム活用成功の背景として、小学校区である地区や自治会にあたる集落では、伝統的な農村の地縁的関係が存在し、集落の自治活動と社会教育活動である分館活動は渾然一体として存在しており、自治会と分館の建物は共有され活動も両者の協力関係の中で開催されていることから、住民は何が公民館活動で何が自治会活動か区別して捉えることが出来にくい状況、あるいは、両者を区別する必要性が住民にはないというのが実情であることが明らかとなった。つまり、集落＝区の住民には、分館または地区公民館の役員になったという意識はあるが、8月の月上旬に開催される人形劇の公演が飯田市を統合する人形劇の祭典であるということや、人形劇フェスタ地区公演実行委員会の一員であるということは、ほとんど意識されていないのである。人形劇フェスタ地区公演が公民館活動の1部であり、市を統合する市民文化活動であるという認識や、行政がまちづくりの中核に位置付けていることへの認識を持つ住民はきわめて少なく、多くの住民にとっては、地区公演は集落の夏の1つの行事と受け止められている。

3点目は、市民の観劇への参加についてである。この点について、幼稚園および保育所の保護者を対象とした調査によって、人形劇フェスタへの市民の観劇参加の実態を分析した。

38年間にわたり継続開催されている歴史的事実から、幼少期の参加経験が市民の飯田市や人形劇フェスタへの愛着を育み、それが成人してからの人形劇フェスタへの参加に影響を与えている

のではないかと想定したが、調査結果からはそれを裏付けることはできなかった。市民（保護者）は、子どもが人形劇を喜んで観ると考え、人形劇を子どもに観劇させたいと思い、自分1人では観に行くことを考えていない。つまり、人形劇フェスタは子どもを連れて参加する対象なのである。こうした保護者と子どもの存在によって、人形劇フェスタは累計45,000人もの観客を毎年数え、38年間にもわたり継続的に開催されてきたといえる。そして、保護者らの人形劇への理解を深め人形劇フェスタへの関心を広げた背景には、市内の幼稚園や保育園の存在が大きく影響していた。園が保育内容に人形劇を積極的に取り入れることで、保護者は子どもが人形劇を楽しむことやその教育的意義を理解し、そして、園が人形劇フェスタの情報を提供することで、保護者の参加が促進されていると考えられる。

以上より、人形劇フェスタへの市民の運営への参加に関しては、住民による自治機能を有する地域社会＝集落を基盤とした分館を基底とする三層構造の公民館システムを活用することで、運営への多くの市民参加を実現させたが、人形劇フェスタで理念として掲げられ、飯田市のまちづくりとも結びつけて目指されていた「主体的な市民」や「市民の主体的な参加」は、1,900人を擁する地区公演実行委員会において、果たして妥当するかどうか疑問であるといえる。つまり、集落＝区の住民は、あくまでも区の住民の意識であり、集落＝区が飯田市に属しているという意識はあっても、自分自身が市民として飯田市のイベントの一角を担っているということは意識されていない実態が明らかとなった。また、観劇参加に関しても、38年間の継続開催の中で、意欲的な観劇参加をする市民の育成は見られず、保護者として子どもに観劇させることを目的とした参加が市民の多くを占めていた。

そして、人形劇フェスタへの市民の運営および観劇参加の実態分析を通し、日本で市民社会が成り立っているのかという問題にも通じる新たな課題が明確となった。少なくともいいだ人形劇フェスタにおいて、市民参加を支えていたのは、地区公演にみられるように地縁的伝統社会である集落の一員という存在を通して社会活動に参加する住民であった。さらに、多くの住民による地区実行委員会と、自身の意志により参加する本部実行委員会の二重構造によって成り立っていることが明らかとなり、意識も参加の仕方も異なる住民と市民を、1つの活動の担い手としてまとめる枠組みが、人形劇フェスタという文化活動であり、そこに公民館の三層構造にのせて両者のパイプ役として公民館主事がかかわらせたことが、飯田市が行政として施策をうまく進めることができた鍵と言える。

また、住民に含まれていない人々がまだ多くいることは、看過できない課題であるといえる。高齢者や若い世代の核家族、また、近年増加傾向にある母子・父子世帯など、地域社会の相互支援を必要とする市民ほど、地域住民に包含されず、こぼれ落ちている現状があり、この解決に向けた取り組みは喫緊の課題と考える。本論では観客の参加に関しても考察し、小さな子どもを持つ保護者がわが子を連れて観劇参加している実態を把握できた。人形劇フェスタは、母親である女性が、地域社会の活動に参加する機会となっており、先に述べた、地域住民からこぼれ落ちる人々への地域社会への参加にも大いに役立てることが出来る活動だといえる。今後、この文化活動を通したまちづくりの方向性をあらためて市民と行政が考え直す必要があることとあわせ、飯田市の地域社会の実態を捉え、住民の視点からこの人形劇フェスタという市民文化活動を通したまちづくりを見ていくことの重要性が明らかとなった。

(3,965字)



